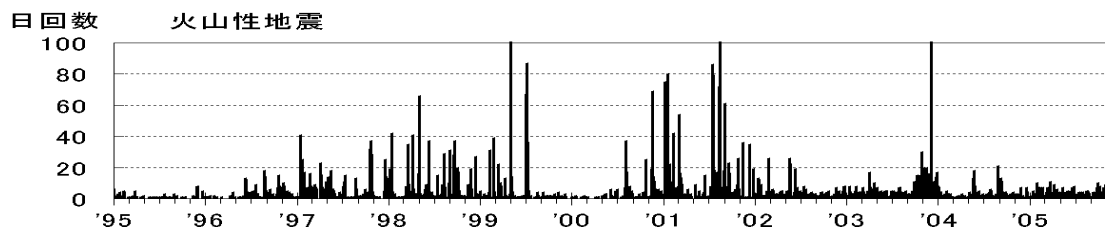
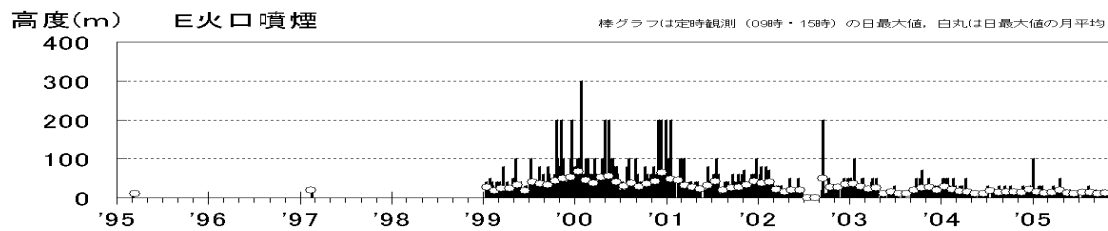
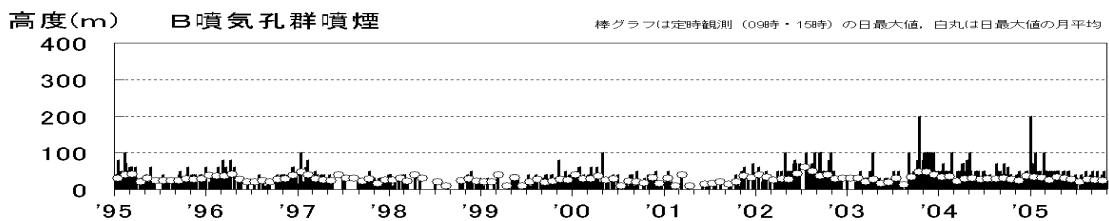
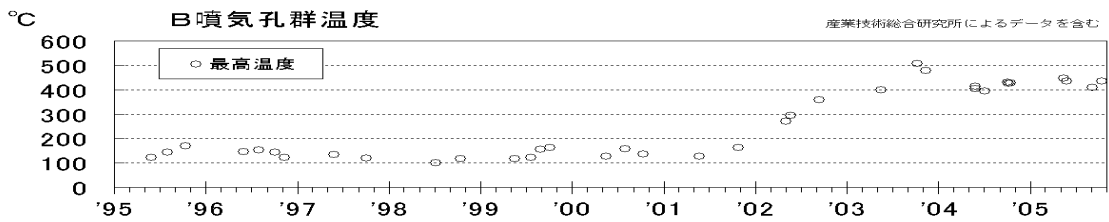
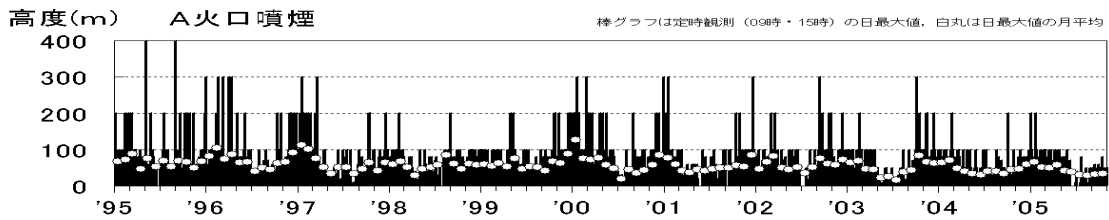
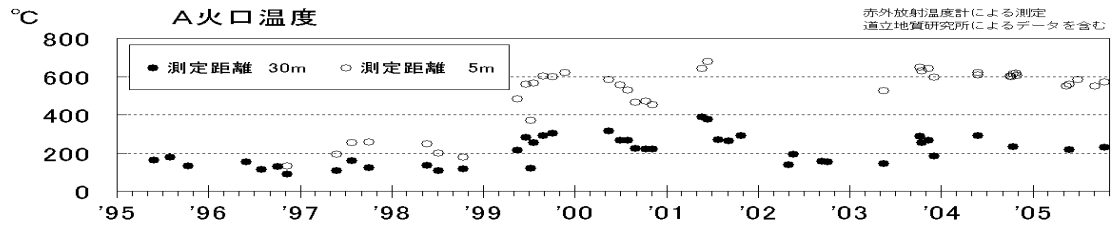


# 樽前山

## 1 概況

11~13日に実施した調査観測では、各火口の状況に変化はありませんでした。A火口やB噴気孔群は高温の状態が続いており、火山活動は引き続きやや活発な状態です。火口近傍では注意が必要です。



最近の火山活動経過図(1995年1月1日~2005年10月31日)

2 噴煙の状況

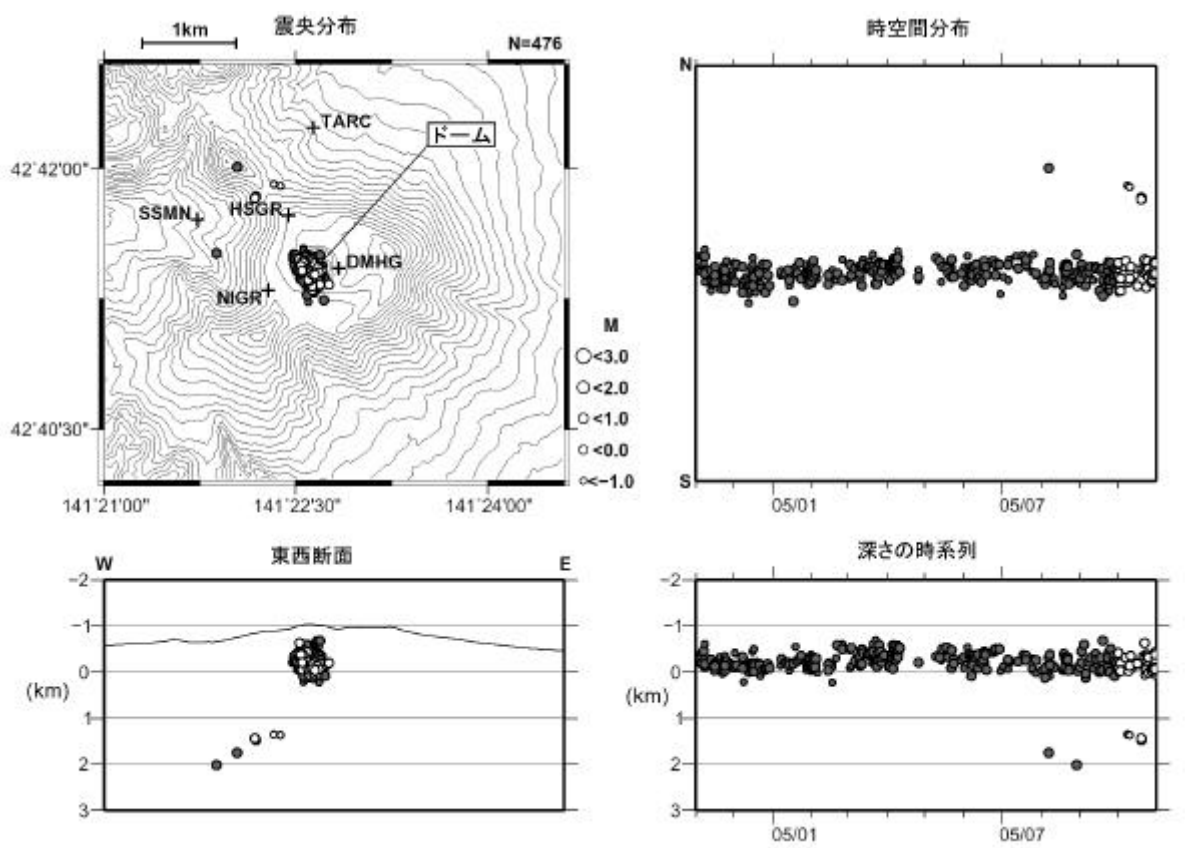
各火口の噴煙の状況は前期間と大きく変わらず、噴煙の高さは火口縁上おおむね 100m以下で推移しました。

3 地震および微動の発生状況

火山性地震は1日あたり0~10回と概ね平常レベルで経過しました。震源のほとんどはこれまでと同様、山頂火口原浅部に分布していました。火山性微動は観測されませんでした。

地震・微動の月回数(C点)

2004~2005年	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
地震回数	39	25	55	59	77	62	46	75	33	46	50	96
微動回数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0



樽前山の震源分布図(丸印:震源、+印:地震観測点)

印は今期間(2005年10月1日~31日)に求まった震源を示しています。

印はは前期間までの11ヶ月間(2004年11月1日~2005年9月30日)に求まった震源を示しています。

震源は山頂ドーム直下の海面付近に集中し、ドームの北西及び西約1.5km付近のやや深いところ(海面下約2km前後)にも分布が見られます。今期間に求まった震源は、山頂ドーム直下の海面付近に集中している他、ドームの北西にも分布しています。

震源分布図の説明

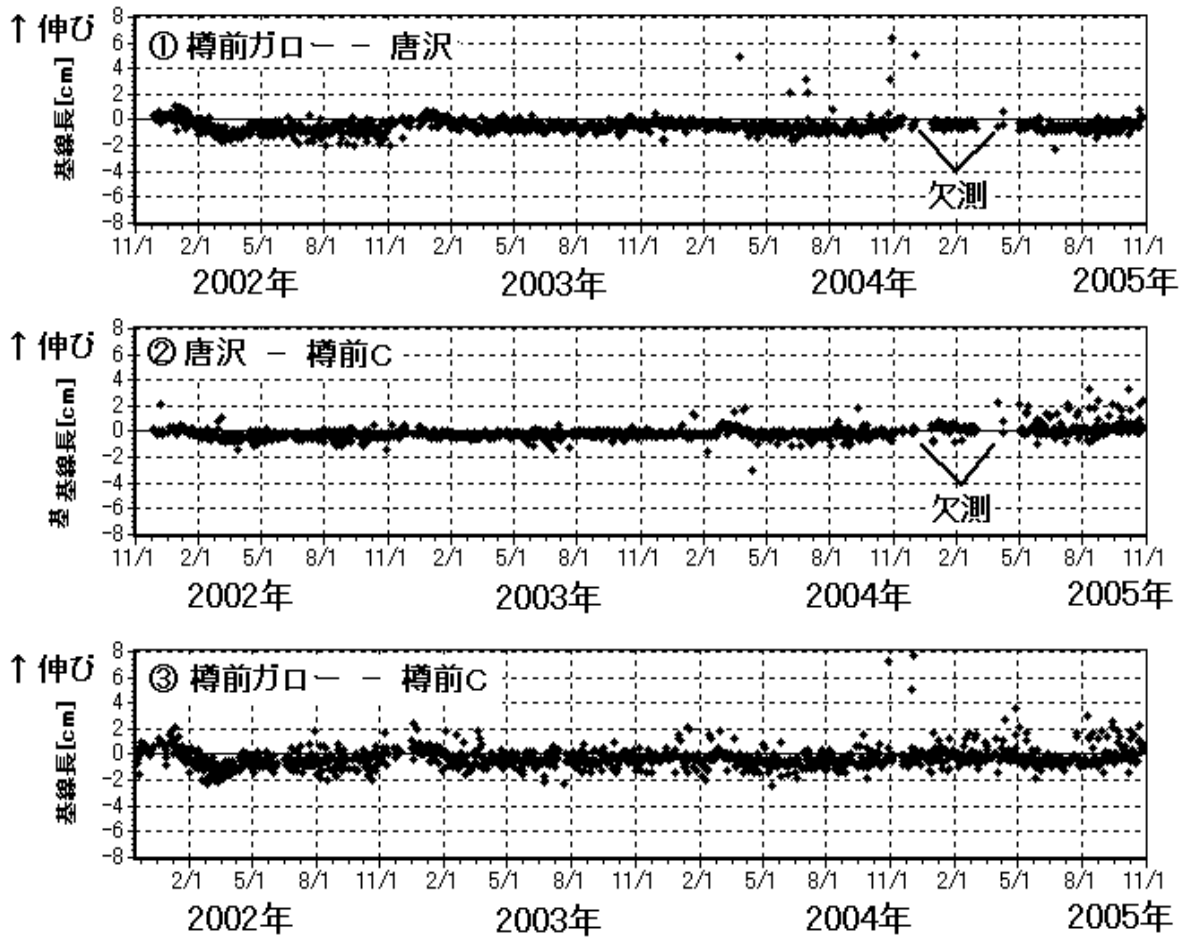
東西断面:震央分布で表示された範囲を東西面に投影して、地震の垂直分布を示した図です。

時空間分布:震央分布で表示された範囲を時間経過とともに南北面に投影することで、震央の位置がどのように推移しているかを示した図です。

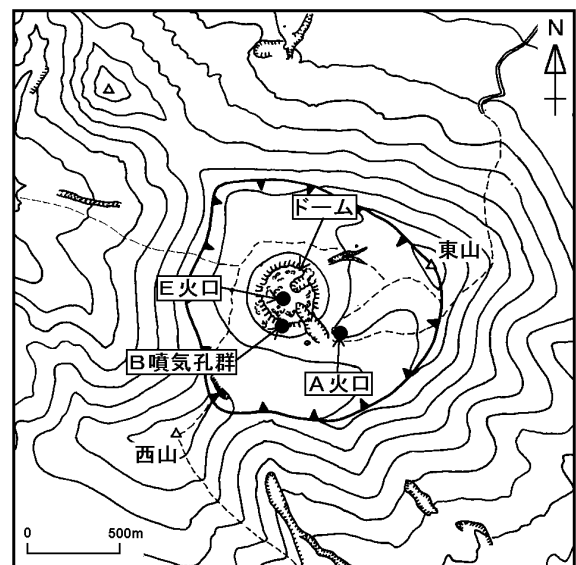
深さの時系列:時間経過とともに震源の深さがどのように推移しているかを示した図です。

4 地殻変動の状況

GPS 連続観測では、火山活動に関連すると考えられる変動は認められません。



基線長変化(2001年11月14日~2005年10月31日)



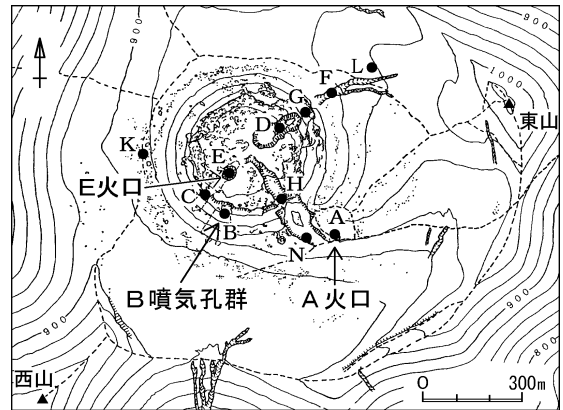
樽前山山頂火口原図

5 調査観測の結果

10月11～13日に調査観測を実施しました。A火口およびB噴気孔群では高温の状態が継続しています。

【A火口】

噴煙の勢いは弱いものの、強いSO<sub>2</sub>臭が認められました。赤外放射温度計\*で測定した火口温度は約570と、前回(2005年6月:約580)と同様、依然として高温の状態が継続しています。



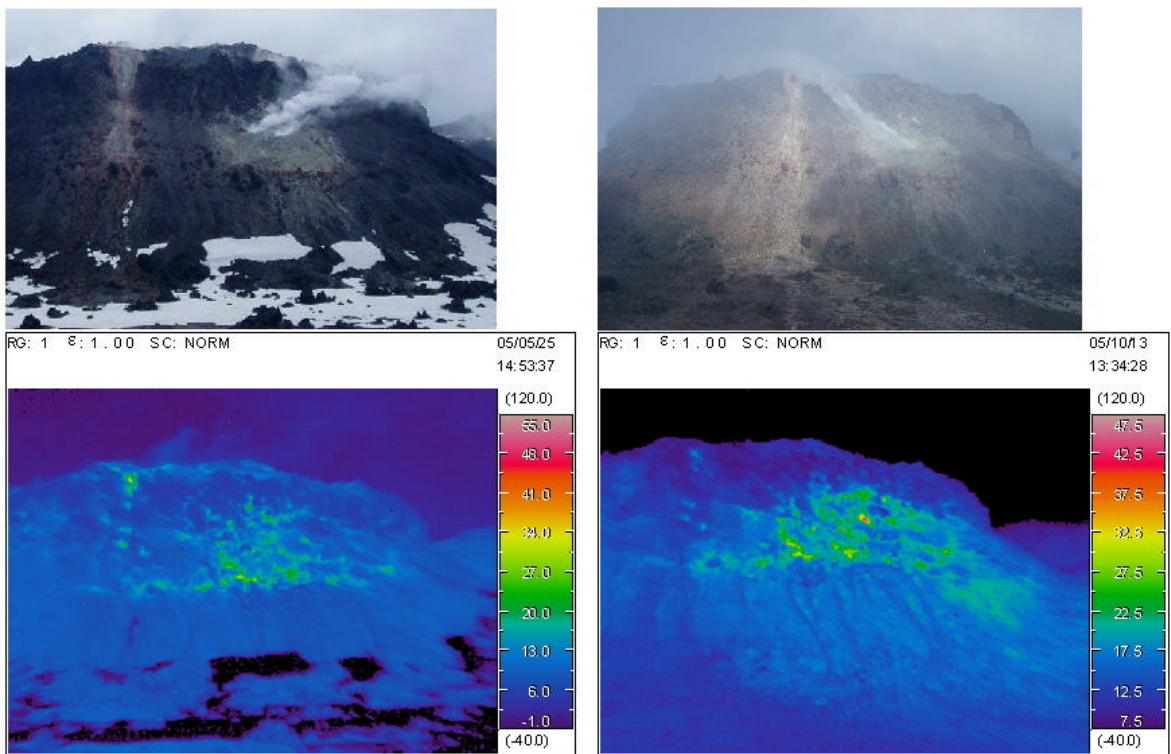
樽前山山頂ドーム周辺図(A～N:調査観測ポイント)

【B噴気孔群】

複数の噴気孔から白色の噴気を勢いよく噴出し、強いSO<sub>2</sub>臭が認められました。最高温度は約440と、前回(2005年5月:約440)同様に引き続き高温の状態が続いています。赤外熱映像装置\*による観測では、新たな高温域は認められませんでした。

【その他の火口・地熱域】

特に変化はありませんでした。



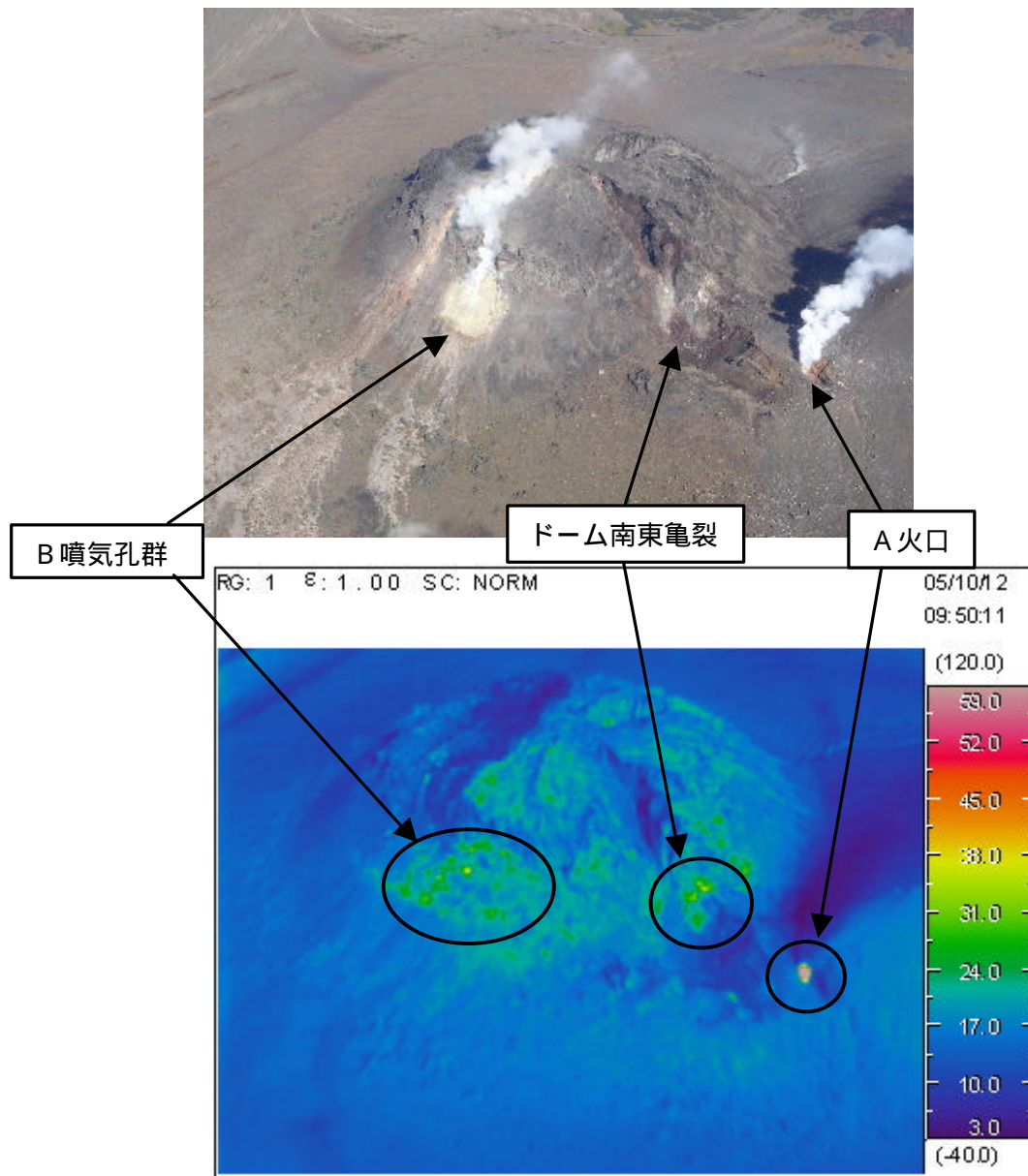
B噴気孔群およびドーム南西亀裂の表面温度分布(左図:2005年5月、右図:2005年10月)

\* 赤外放射温度計や赤外熱映像装置は、物体が放射する赤外線を検知して温度や温度分布を測定する計器です。熱源から離れた場所から測定できる利点がありますが、熱源から離れるほど測定される温度は実際の温度よりも低い値になってしまいます。また、噴煙や霧で測定対象が見えにくい場合には温度測定ができないこともあります。

6 上空からの観測結果

10月12日に北海道開発局の協力を得て実施した上空からの観測では、ドームおよびドーム周辺の火口や地熱域の状況に変化はありませんでした。

赤外熱映像装置<sup>\*2</sup>による観測では、A火口、B噴気孔群およびドーム南東亀裂に対応する高温域の拡大等は認められませんでした。これら高温域の他にドーム全体に温度のやや高いところが目立ちますが、これは日射の影響によるものと考えられます。



南側上空から測定したドームの表面温度分布  
(図に示した高温域以外の温度の高い部分は日射の影響によるものと考えられる)